
続・聖剣士伝説リリカルなのは

マテマテフェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・聖剣士伝説リリカルなのは

【Nコード】

N 6 4 1 8 M

【作者名】

マテマテフェイ

【あらすじ】

聖剣士の力を奪われメシアに人格を徐々に乗っ取られていくスウエン

フェイト達はスウエンを救うためにアルバークのもとへ向かう

第1話失う力（前書き）

聖剣士伝説リリカルなのはの続きです

第1話失う力

「それじゃあね、スウエン」

「ああ、また明日な」

スウエンはフェイトと別れ、自分の家へと歩いていく。自分の体の異変も知らずに…

「なんかやけに疲れるな…仕事のしすぎか？」

スウエンは制服のまま布団の上に転がると、なのははから連絡が来る

「スウエン君、起きてる？」

「どうしたんだ、なのは？」

「スウエン君、今すぐ時空管理局に来れないかな？」

「わかった、すぐ行く!？」

スウエンを一瞬、痛みが襲うが、すぐに消える

「どうしたの、平気？」

「ああ、今すぐ行く」

スウエンは携帯をしまい、家から出て、なのはに指定された場所へと向かう

「スウエン君、顔色悪いけど平気？」

「一応な、それで何があったんだ」

スウエンが聞くと、魔力刃が飛んでくる

「スウエン君、後ろ!!」

なのはに言われ振り向くと、魔力刃はスウエンに刺さる

「グッ…」

スウエンは何とか魔力刃を抜こうとするが、魔法が発動せずだんだんと体内へ入る

「くそ…AMFか」

スウエンは仕方なく素手で抜こうと、するが触れられない

「どうなってんだ？」

「どうしたの、スウエン君？」

「なのはか、なんかこれが抜けないんだ!？」

スウェンはなのはから距離を離す

「どうしたの、スウェン君」

「もう下手な芝居は止める、アルバーク!！」

スウェンが言うと、なのはの姿が消えアルバークが現れる

「お前の目的はなんだ？」

「君の力だ…聖剣士のね」

「何だと!？」

スウェンが驚くと、目の前に映像が写る

「君が素直に渡せば、彼女達に危害は加えない」

「俺が断れば…」

「こうなる」

映像の中のフェイトは血を吐き、倒れる

「だがそれはダミーだ、安心していい。だがもし断れば全員殺す」

「ふざけやがって…」

スウェンはアルバークを睨み言う

「さあどうする? 君は仲間が、大事ではないのかね」

「わかった力を渡す」

スウェンは体内から七色に光る玉を出し、アルバークに渡す

「確かに戴いた、それではな…」

アルバークが消えると、同時にスウェンに刺さっていた魔力刃も抜ける

第2話造られた命

アルバークが消えた後、スウエンはその場に倒れ血を吐いていた
「ハアハア…グッガハッ」

血を吐き続けスウエンの目の色がだんだんと青色から白色へと変わって行き、髪の色も茶色から白色へ変わって行く

「どうなちまつたんだ俺の体…駄目だ。何も考えられない」

スウエンは何とか立ちあがろうとするが、体に力が入らず無理に力を入れると口から血が出た

「クッなんとかここから動かないと…」

スウエンは自分の体のことを考えず、無理やり立ち上がると全身から血が出て倒れる

「スウエン！！」

何とかフェイトはスウエンを支えるが、スウエンはもはや死人と同じ状態だった

「平気、スウエン？」

「フェイトか…ごめん迷惑かけて」

「今は喋らないですぐになのは達も来るから」

フェイトの言葉通りなのは達が来る

「フェイトちゃんスウエン君は？」

「今はあそこで横になってもらってる」

フェイトが指した方を見ると変わり果てた姿のスウエンがいた

「検査結果が出たよ。やっぱりスウエンは聖剣士の力別名フォースを抜かれてる」

「それじゃスウエンは…」

「かなり危険な状態にあるね。それにまだフォースの力はあまり解明されていない」

ユーノが言つとシャマルが来る

「あなたの予測どおりね今の彼はリンカーコアを命の代用として生

きているわ」

「えっそんな事可能なんですか」

「不可能ではないよロストロギアの力を使えばね」

ユーノはプレシア事件の時の映像を出す

「これがどうかしたの？」

「スウエンはもうこの時に致死量の血を流してる」

「それじゃ…スウエンはこの時にはもう…」

フェイトやなのはは涙を流す

「その時に一命を取り留めたのはおそらくロストロギアそれも過去に埋め込まれたね」

「それじゃ聖剣士の力は関係ないの？」

「いやおそらくはそのロストロギアを命の代用にするのに使用していたはずだ」

「それが外れたらスウエンは…死ぬ？」

フェイトが言うとうーノは静かに頷く

「そんなのウソだよ…」

「いや本当だよだからこうして現にスウエンは少しでも長く生きようと体を少しずつ変えてるんじゃないか」

ユーノの言うとおり今のスウエンは9歳の頃の体に戻り髪の色ももとの色へと戻り目の色も戻る

「僕なら平気だ…メシアがいるからね」

スウエンは立ち上がり言う

「スウエン平気かい」

「一応ねこの体ならまだ生活することも可能だ」

スウエンは笑顔で言う

「でもあまり無理はしないでねスウエンまだフォースの力は全てわかってないんだから」

「なら話すよ聖剣士の力それに僕について」

スウエンが言うと夜が明けた

第3話ロストロギアを命にするもの

「でもその体で無理しなくても…」

「でもいつかは話さなければならぬことだ。なら今ここで言っよ」
スウェンは話し始める

「僕が聖剣士の力を手に入れたのはアリシアが死んだときなんだ」

「それってもしかしてアリシアがくれた力とか？」

「そうじゃないよ僕はあのときに声を聞いたんだ」

「どんな声？」

フェイトが聞くとノルンが降りてくる

「私が彼に預けたのです聖剣士の力を」

「そしてその後は君達言うとおりプレシアに捕まり聖剣士の力を奪われ死んだ」

「それじゃどうして生きてるの？」

「それが引き金となり僕の体内に埋め込まれていたエルデスファイアが発動して生きているんだ」

スウェンが言うところノルンは調べ始める

「あつたエルデスファイアえっ」と何何、一度死んだものを適正が合えば生き返らせるロストロギアってそれじゃスウェンは適正があつたのか」

「そう言う事だね」

スウェンが笑いながら言うところノルンはスウェンの前に立つ

「あなたのエルデスファイアももうすぐ消えるでしょう」

「それは何となく気がついたよ。それに僕は2度の人生を体験したんだ悔いはない」

スウェンが言うところノルンはスウェンからエルデスファイアを引きずりだす

「スウェンこれが私にできる最後のことです」

ノルンはスウェンの中に何かを入れ消えた

第4話戻る命

「ノルンは僕に再び命をくれた」

「そうなんだでも身長は変わらないんだね」

「こればかりはきつと聖剣士の力を取り戻さないと駄目なんだよ」

スウエンが言うフェイトはスウエンを抱っこする

「ちょっと放してよフェイト」

スウエンは顔を赤くしながら言う

「スウエン君顔赤いね」

「なのは笑ってないで助けてよ」

スウエンが言うフェイトは放そうとしない

「それじゃスウエン君のことお願いねフェイトちゃん」

「わかったよ」

「僕は一人でも暮らせる平気だよ」

「駄目だよ一人じゃ危ない」

フェイトはスウエンを放そうとしない

「それじゃあ僕もこれで…」

「ちよつと待つてユーノ助けてくれてもいいじゃないか」

「形は違えど好きな人と一緒に住めるならいいじゃないか」

「そう言う問題じゃないだろう!!」

スウエンは怒鳴るがユーノは聞こえないふりをしてどこかへと行く

「それじゃ私達も帰ろうか…スウエン」

「一人で歩けるからそろそろ放してくれない?」

スウエンに言われフェイトはスウエンを下におろし手を繋ぐ

「これなら平気だよスウエンも」

「まあこれぐらいなら…」

「それじゃ帰ろうか」

フェイトとスウエンは手を繋ぎ帰った

第5話平和な時前編

あれから一日後スウエンはフェイトの家に住んでいた

「どうして僕はここに…」

「はいスウエンご飯だよ」

フェイトは嬉しそうに言う

「ありがとうフェイト…」

「呼び捨ては駄目だよスウエン。お母さんやママを付けて呼んでね！」

「わかったよフェイト母さん」

スウエンが言うとフェイトは笑顔になりスウエンにご飯を食べさせる

「フェイト僕なら一人で食べられるよ」

「駄目だよ食べさせてあげるから口を開けて」

スウエンは仕方なく口を開けご飯を食べさせてもらう

「後片付けは僕がするよ」

スウエンが食器を持つとするとフェイトが止める

「怪我をしたら危ないから私がするスウエンは休んでて」

フェイトに言われたとおりスウエンは椅子の上で休む

「ちよつとフェイト過保護すぎじゃないかおかげで結構疲れた」

スウエンが言うとなのはから連絡が来る

「どうしたのなのは？」

「いやー二人きりの生活楽しんでるのかなーと思ってね」

なのはは笑いながら言う

「でもスウエン君も大変でしょフェイトちゃん過保護だから」

「もしかしてなのは知ってたの？」

「当たり前だよーそう言えばスウエン君はいなかったんだっけ」

なのはが話すとヴィヴィオの声が聞こえる

「本当だよスウエンパパ小さい」

「なっヴィヴィオどうしてそれを…」

「スウェン誰と話してるの？」

突然のフェイトの声にスウェンはフェイトのほうを向く

「何でもないよフェイト母さん」

「それならいいけどスウェン今日は仕事だよね一緒に行こうか」

「うんわかった」

スウェンが頷くとフェイトは自分の部屋へと向かう

第6話平和な時後編

「スウェン準備できた？」

フェイトが聞くとスウェンは頷く

「それじゃそろそろ行こうか」

フェイトと手を繋ぎスウェンは時空管理局へと向かう

「なんか大きいね」

「仕方ないよ。スウェン体小さいこと忘れたの？」

「あっそうだった」

スウェンが言っているとフェイトはスウェンの腕を引っ張り中へと入る

「みんなおはよう！！」

「あれ、今日はやけに元気がいいですね」

「そうかな？」

フェイトは赤くなりながら言う

「それよりなのは達は？」

「そう言えばいつもの場所で待つと言っていたよ」

「ありがとうわかった」

フェイトとスウェンは急ぐ

「なんだろうなああの少年？」

「うーんもう少し大きければスウェンさんに見えなくもないけど」

全員が話し合っている最中にスウェンとフェイトはいつもの場所へ来る

「おはようなのは」

「おはよう二人とも」

「おはようなのは…」

スウェンが言っていると後ろからシグナムが斬りかかる

「反射神経は衰えていないようだな」

「もし衰えていたらどうする気だったんですか」

「その時はその時だ」

シグナムは剣をしまい言う

「それよりスウェン君フェイトちゃんのことお母さんって呼んでたよね」

「いや正確には母さんだよ」

「お母さんと呼んだ事には反論はしないんだ」

スバルが言うとヴィヴィオがスウェンに向かう

「本当に小さいスウェンパパでも本当に戻れるの？」

「さあ、どうだろうでも聖剣士の力が戻ればきっと戻れるよ」

「戻れないときはどうする気スウェン君？」

「さあ、わからないよ。未来のことなんて」

スウェンが言うとアルフが来る

「なあスウェンその姿でいても問題ないのかい」

「一応ね！？」

スウェンは突然苦しみだし倒れる

「スウェンどうしたの平気！？」

フェイト達を見ると目の色が紫になり体の半分は漫画やアニメドラマなどに出てくる悪魔などの体になっていた

「くううううううう」

「スウェン本当に平気なの？」

「今はそつとしいたほうがいいかも」

「わかったよでも本当に平気なのかな」

フェイト達は心配しながら見ているとユーノとクロノが来る

「遅かったか…」

「えっどう言う事」

「エルデスフィアあれにはバッド効果もちゃんとあったんだ」

「どんな…？」

フェイト達が聞くとユーノはデータを出す

「これは…」

「そっだよエルデスフィアには体内に毒を入れる効果があったんだ」

「えっ…毒！？」

なのはが驚くとスウエンの口から血が出る

「平気なのスウエン」

「まだ後5時間の猶予はあるよでも今のスウエンは戦力外だ」

「誰を倒せば助かるの？」

「アルバーク・サイシン彼を倒せば聖剣士の力はスウエンに戻る筈だよ」

ユーノが言っているとフェイトは飛びだす

第7話はやての恋人

「フェイトちゃんどこ行くの？」

「アルバークを倒してくる」

「ちょっと待ってよ！フェイトちゃん！！」

なのはが止めるがフェイトはどこかへ行ってしまう

「なのは、フェイトのことは平気だと思っよそれより今は…」

コーノはスウェンを見る

「確かにやばそうだもんね」

なのはが言っとシヤマルやコウが来る

「あれ、コウ君久しぶりだね」

「なんだよ。その妙な反応は？」

コウは驚く

「はやてちゃんはそう言えばどこ？」

「それが…」

なのはが聞くとコウは冷や汗をかく

「やっと見つけたで！コウ君」

「いや何しに来たはやて…」

「とぼけるんやないで最近時空管理局なんで休んでるや？」

「いや何の事ださっぱりわからん」

コウが言うとはやては笑いながらコウに魔法弾を撃つ

「いきなり何をするんだ！はやて？」

コウが見るとはやてに殴られ吹き飛ぶ

「何やってんの？」

「なんでもないそれより病人は？」

「あそこだけ…」

なのはが指をさすと小さい頃のスウェンが倒れていた

「何故、スウェンが小さくなっているんだ？」

「そんなことどうでもいいから早く連れてって」

「わかったそれじゃあな」

コウはスウェンを担ぎその場から離れる

「はやてちゃんコウ君とうまくいてないの」

「いやゝそういうわけやないんやけど…」

はやては顔を赤くしながら言う

「あつそうやうちまだ仕事が残ってるんやつたそれじゃあななのは
ちゃん」

はやてはどこかへと走り去った

第8話条件

「どこにいるの…アルバーク」

フェイトは周りを警戒しながらアルバークを探す

（こうしてる間にもスウェンは…）

フェイトがそう思っていると、肩をたたかれる

「誰!？」

フェイトが振り返るとそこにはアルバークがいた

「あなたは…」

「お初にお目にかかります。私はサイ・アルバーク」

「あなたがアルバーク…あなたのせいで」

フェイトはバルディッシュを握りアルバークに向ける

「やはり私を探していましたか。フェイト・T・ハラオウン」

「あなたに聞きたいことがあります。アルバーク」

「聖剣士の力を返せそうですね」

「わかってるならおとなしく渡してください」

フェイトが言くとアルバークはフェイトに向けて魔力弾を放つ

「こんな場所でききなり魔力弾を…」

「積もる話もそれぐらいにして私の話を聞いてくれますか」

「どんな話ですか」

「ここでする事ではありません。そうですねあの公園なんてどうですか」

フェイトは頷きアルバークについていく

「それで何の話ですか」

「聖剣士の力返してあげなくもないですが、条件があります」

「条件とは一体何？」

「あなたが勝てば返して差し上げます。ただしあなたが負ければ…
あなたはこの世界より消えます」

アルバークが言くとフェイトはBJを着てアルバークを見る

「なるほど…条件を飲むと言うのですね」

「当たり前だよ。そして聖剣士の力は返してもらおう!!」
フェイトが言っているとアルバークの戦闘態勢に入る

第9話命を賭けてでも守りたいもの

「フォトンランサー!!」

「甘いですね。その程度では」

アルバークはフォトンランサーを弾き笑う

「どうしましたもう終わりですか？」

「そんな訳…ない!!」

フェイトは真・ソニックフォームになりアルバークに斬りかかる

「はあああああ」

「甘いですよその程度のスピードでは…私は捉えられません」

アルバークはフェイトが振り下ろすバルディッシュを止める

「不完全でもこれだけの力が素晴らしいですね聖剣士とは!!」

「クッ…」

フェイトは吹き飛ばされ何とか態勢を立て直すがバルディッシュは砕け散る

「そんな…バルディッシュが」

「決着はつきましたねそれではさようなら」

アルバークがフェイトに止めを刺そうとすると魔力弾が飛んでくる

「アルバーク…フェイトから離れる!!」

「そんな体で無理をしなくてもいいでしょうに」

アルバークが言うのと背中から羽が生えたスウェンがいた

「スウェンその姿」

「フェイトには関係ない俺個人の問題だ」

「ふざけないでよ。スウェンその体本当に平気なの」

「俺が自分の意思を保っていられるかが問題だが必ず守ってやる」

スウェンが言うとアルバークはスウェンに向けて魔力刃を投げる

「はあああああふん!!」

気合だけで魔力刃を弾き手に持っている小さめの魔力刃が付いてるナイフをアルバークに向ける

「どうしたのですか。スウェン何かをするのでは？」

「うぐっ…何をした貴様」

「さあなんだろうかね？」

アルバークが言々とスウェンは血を出し倒れる

「さあもう死ぬがいい…」

アルバークがスウェンにつきつけるとフェイトのほうから聖剣士の力を感じる

「止めて…それ以上スウェンに近づかないで!!」

「何…？」

アルバークが驚くのと同時にフェイトは魔力を帯びた手刀をアルバークに当て聖剣士の力をスウェンへと入れる

第10話思い出

「あれ…ここは？」

フェイトが目を覚ますとベッドの上だった

「起きたか…」

「コウでもどうして私はここに？」

「あそこで倒れていたのを俺が運んできたそれだけだ」

コウが言くとフェイトは周りを見る

「ねえスウェンは？」

「さああなたが確かかなことはこれを渡せと言われたことぐらいだ」

コウはフェイトに手紙を渡す

「これ誰が渡したの？」

「スウェンだ」

コウが言くとフェイトは読み始める

「フェイトありがとうな聖剣士の力を取り戻してくれてでもそれはもう受け取れないそれにもう俺は時空管理局へ戻れないだから自害する後は幸せになフェイト スウェン・レイクより」

「スウェン本当に死ぬ気なの」

フェイトは手紙を潰し立ち上がるうとするがうまく立てなく倒れる
「無理をするな今の状態ではまともに行動はできない今はなのは達
に任せるんだ」

「でもスウェンは自ら命を断とうとしている」

フェイトが言くとコウの電話が鳴る

「俺だどうしたんだはやて」

「今…フェイト…連れて…公園」

「何を言ってるのか聞こえないぞはやて！！」

コウは叫ぶが電話の向こうから聞こえるのはノイズ音だけだった

「くそ…行くしかないのか」

「ちよっと待って私も行く」

フェイトはコウに言うがコウは何もしゃべらずに連絡が途絶えたであ
ろう場所へと急いだ

第11話メシア覚醒

「ずいぶんと遅かったねフェイト……」

「そんな……スウェン？」

「違うよスウェンは死んだ今の僕はメシアとして覚醒したんだ」

「ずいぶんな物言いだなだが隙だらけだ」

「コウは自身のデバイス『ジークフリート』を出しメシアに向ける

「さあ言えこの距離なら外しはしないはやて達はどこだ」

「そんなに熱くならなくてもすぐに会わせてあげるよあの世でね！

！」

「貴様！」

「コウはジークフリートでメシアを突き刺すが感触が全くない

「どう言う事だ」

「さすがはジークフリートだ一突きされてたら危なかったかもね」

「メシアは笑いながらコウを見る

「笑ってないで降りてこい」

「これは失礼君にも騎士道精神があるのかな」

「そんなものはもう捨てた」

「コウはジークフリートを構えメシアを見る

「フェイトはどうやらデバイスがないようだね」

「そんな事は今は関係ない行くぞ……！」

「そんな単調な攻撃に当たるとでも……？」

突然槍が曲がりメシアに当たる

「多少はアレンジしてある俺の使いやすいうりにな」

「なるほど君達を見くびっていたようだもう手加減はしない……！」

メシアは自分の目に腕を入れ目を取る

「紹介するよこれが僕のデバイス『デビルソウル』さて始めようか
第2ラウンドだ」

「いいだろ貴様は俺が倒す」

「本気で言ってるの？」

「当たり前だ」

コウが言っているとコウの周りに何かが現れる

「なんだ…これは？」

コウが驚いているとジークフリートがもとのペンダントに戻りB J
も消える

「何が起きている」

「もう消えなよ…デスゲイル!!」

コウはメシアの放った魔法に当たり倒れる

第12話罪は自分の手で

「さてとこれで邪魔者は全て消えた後は…」

メシアはフェイトを見る

「なんで逃げるのフェイト」

「あなたはスウェンじゃないスウェンは仲間には誰よりも優しくかった」

「僕は君だけには危害は加えないよ…フェイト」

「寄らないで!!」

フェイトが言うとメシアは笑う

「まだあいつのことを信じてるのかいもう無駄だよスウェンの意識は死んだ」

「そんな訳ないスウェンはいつだってみんなを守るために命を賭けていた」

「だから何僕があいつに負けるとでも？」

メシアが言うと後ろから魔力弾が飛んでくる

「まだ生きてたのか君達もしぶといね早く死ねば楽だったのに」

「まだ死ねないよ皆の明るい未来を勝ち取るまでは」

「そうだなこんなことで諦めては機動六課の名に傷がつく」

「それにスウェン君にはまだ働いてもらわなあかんのや」

皆が言うとデビルソウルが光りだす

それと呼応するようにフェイトの手に握られているクライスダストが光る

「なら君達はまとめてこの僕が塵一つ残さず消滅させてやるよ」

「止める!!」

「!!」

突然の声に全員が驚く

「貴様どうやって意識を出している？」

「俺の意識にみんなが呼び掛けてくれたからさ」

「僕はメシアだこんな場所で死にはしない消えろ、消えろ」

「無駄だメシア俺はもう自分の自我を取り戻した後は…」

スウェンはフェイトを見る

「フェイトお前に俺の残っている力を全て渡す後はよろしくな」

「スウェンそれって…」

フェイトが言うとかライスダストは勝手にバーストブレードモードになる

「ターゲット確認デイメンジョンホール形成刀身固定完了」

「止めて…スウェン！！」

「デイメンジョンブレイカー！！」

クライスダストはフェイトの腕から離れスウェンの胸へと突き刺さる
「貴様、血迷ったか」

「俺は冷静だぜ。メシア…」

「僕はこんな場所で消えるべき存在ではない…まして貴様などと」

「俺だってお前なんかと心中する気なんかさらさらねえよ」

スウェンは血を吐きながら言う

「僕はここにいるもの全てを殺してでも生き延びる」

「お前は俺と共にここで死ぬんだ」

「ふざけるな！僕は必ず生き延びる貴様のような下等生物とは違うんだ」

「誰にでも平等なのは死だけだましてやそれがいかに優れていようとな」

スウェンが言うとかライスがさらにスウェンへ突き刺さる

「スウェン！！」

「来るな！！これが俺なりのけじめだ」

「調子に乗るなまだ僕の最後の力を使えば！？」

「お前にもはや奥の手は残されていないこの一撃に全てを賭けたからな」

スウェンが言うとかライスダストはスウェンの心臓を貫通する
「ぐおおおおおおお」

「ぬああああああ」

「平気なのスウェン!!」

「フェイト…皆…それじゃあな…」

スウェンは消えその場にはクライスダストが残った

第13話決着

「スウエン君は自分の命と引き換えに世界に平和をもたらせたんだね」

「でも…これで満足なのかなスウエンは」

「仕方無いよフェイトちゃんでも確かにスウエン君が死ぬ必要あったのかな」

「これでまた俺の知る戦友が一人消えたか」

「コウが言うとはやてに殴り飛ばされる」

「いきなり何をする」

「まだスウエン君は死んだとは決まってるじゃないで」

「それはそうだがあの場合死んだと判別する以外にないと思うが」

「だから君の理屈はええねん今はスウエン君を探すことが最優先やはやてが言うとも目の前から誰かが来る」

「もう少しで消されるところだった」

「もしかしてスウエン？」

「フェイトが向かうとコウに止められる」

「今は迂闊に近づくな彼がスウエンと決まった訳ではない」

「でもメシアでもないかもよ」

「それにメシアなら攻撃してるはずだし」

「だが迂闊に近づいては…」

「コウが止めようとすると何かがフェイトに近づく」

「危ない!!」

「えっ…」

「フェイトが振り返るとそこには片目が青で片目が黒の男がいた」

「俺は…誰だそして君は…」

「私はフェイトあなたはスウエンだよ」

「スウエン…その名は懐かしいな!!」

「フェイトの腹を殴り男はフェイトを掴む」

「さあ出てこいスウェン僕と戦え」

「俺は無駄な人殺しは避けたいおとなしく退いてはくれないかメシア」

先ほどの少年がスウェンへと変わる

「どうしても退いてほしいのか？」

「無理なお願いだとは分かっているだがこれ以上お互いに血を流して何になる」

「ふざけた事をぬかすな僕は君に勝つそして世界をすべてリセットする」

「お互い運よく残った命だ俺はこの命を無駄に使いたくはない」
スウェンが涙を流しながら言うともメシアは斬りかかる

「隙だらけだな僕の勝ちだ！！」

「残念だがもうお別れだ…じゃあなメシア」

「ふざけるな僕はまだ死ぬわけには…」

メシアは今度こそ光になり消えた

最終話在るべき筈の正しき明日へ

「スウェン！！」

フェイトはスウェンに抱きつく

「心配かけたなフェイト」

「ううんよかった無事で」

フェイトは涙をふき言う

「今度こそ本当に終わっただんだよね」

「ああ、メシアもアルバークもこの世界から消え去ったもう脅威は消えたはずだ！？」

スウェンは何かを感じ取ったのかフェイトを放す

「下がっている何か得体の知れないものが近づいてる」

「確かにこれは普通の人間の感じはしないな」

スウェンとコウが言うのと目の前の空間が歪み何かが出てくる

「名を名乗れ」

「我の名はスサノオ全銀河の遺志によりこの世界はフォーマットする」

「何だと！？」

スウェンとコウはデバイスを構えスサノオを見る

「この世界は持つてはいけない力を持ったよって消滅させる」

「ふざけた事を言うなこの世界に生きる全てのものを殺す気か」

「その通りだこの世界は危険だいずれ全ての世界を滅ぼす」

「それが本当だとしたら貴様はさしずめ断罪者と言う事だな」

コウが言うのと剣を出す

「だがこの世界を滅ぼす前にやらねばならぬ事があるようだ」

「何だ急に気配が！？」

スウェンは油断など一瞬もしていないのに吹き飛ばされる

「グッ…なんだこいつのでたらめなパワーは」

「ほうあの一撃を防ぎきるとはなかなかやるな」

「何とかあいつの射程内から離れないともう一撃食らったரசすがにまずい」

スウエンは意識が朦朧とする中スサノオを見る

「どうした来ないのならばこちらから行くまで!!」

スサノオはスウエンへ剣を振り下ろす

「ふんはああああああ」

「はああああああ」

何とかスウエンは踏ん張るが徐々に地面に埋め込まれていく

「貴様はこれで終わりだ」

「何!？」

スウエンが見るとスサノオは上空へと飛び思いつきり剣を振り下ろす

「神魔滅殺剣!!」

スウエンに当たりスウエンは血を吐き倒れる

「つまらんな、この程度か」

「グッ…ガハッハアハア」

スウエンは何とか立ちあがりスサノオを見る

「さあ来いよまだ俺は戦えるぜ…」

「なるほど我が最終奥義を持って倒せぬ敵なかなか面白いな貴様名は？」

「スウエン・レイク」

「スウエンか貴様のような猛者がいるのではもう少しだけ楽しみたい我が最終奥義五蓮刃斬が完成した時この世界の命運を決める最終決戦をする」

スサノオはその言葉だけ残し去った

「何とかなかったか…」

「スウエン!!」

フェイトはスウエンを抱えなのは達のもとへ戻る

フェイト編1 話戻る平和

「うつ…ここは…？」

スウェンが目を覚ますと病院のベッドの上だったそして横ではフェイトが寝ていた

「起きろフェイト…」

「スウェン体はもう平気なの？」

「まだ少し痛むが別に問題はない」

スウェンが言っていると看護婦が来る

「あらもう回復したんですか」

「多少痛みますけど一応回復はしました」

スウェンが言っていると先生が来る

「容態はどうかね」

「まだ完全回復とまでは行きませんが一応徐々に回復してます」

「そうかそれは良かった時空管理局の方には私から伝えてあるしばらくは安静にするんだよ」

先生が出て行くとフェイトも準備をする

「それじゃ私も行くね後で皆でお見舞いに来るから」

「ああ、仕事頑張れよ」

フェイトは笑顔で病室を出て行く

「何か必要なものはありますか？」

「いや今は何も無い何かあったら呼びますから」

「そうですかそれじゃ…」

看護婦は出て行く

「グッ…あいつの一撃思ったよりも重かったらしいな」

スウェンは服を脱ぎ痛みが来る場所を触ると血が出ていた

「ふう…何とか致命傷は避けられたようだが血が出てるのは同じか」
スウェンは自分の魔法で血だけ止め廊下へと出た

フェイト編2話すれ違ふ心

「フェイトちゃん、スウェン君の容態どうだった？」

「一応は回復に向かつてるよ。後で皆でお見舞いに行くとは言ってるよ。」

フェイトが言うとかウが来る

「あれ、コウまた任務？」

「それが何故だか知らないがこの任務を本当に受けた奴が風邪らしく俺に回ってきたんだ」

「大変そうだねコウ君」

「自分のスキル上げだと考えればそれほど辛くもない」

コウはそのまま時空管理局を出て行く

「相変わらずだねえコウ君」

「はやても大変だね」

二人が話しているとスバルとはやてが来る

「あれ、二人とも今日は休みだったんじゃない？」

「そうやでなんでここにおるんや？」

「えっ…そんな事言ってた？」

「私も聞いてないけど…」

二人が言うとはやては説明する

「今日から一週間時空管理局は休むやで」

「それと同時に魔導師全員のデバイスは使用が禁止されます」

「それって魔法が使えないってこと？」

「そう言う事になりますね」

スバルが言うとかフェイトは空を見上げる

「どうしたんやフェイトちゃん？」

「別に何でもないよ。それよりみんなでスウェンのお見舞いに行かない？」

「別にええけどフェイトちゃんだけで行けばいいやん」

「スウェンだつてみんなに会いたがつてゐる」

フェイトに言われスバル、なのは、はやてはスウェンのいる病院へ
と行く

「それにしてもいつ来てもきれいやな」

「そうだね、ヴィヴィオやスバル達それに私も一度入院したからね
」

「ここだよ」

フェイトがドアを開けると窓が開いておりスウェンの姿はなかった

「スウェン君いないね」

「すぐに戻ってくるやろ」

「そうですね、スウェンさんは抜け出す人じゃありませんし」

3人が話しているとフェイトは手紙を見つける

「何だろ…この手紙？」

フェイトが広げると所々に赤い染みが付いていた

「どうしたのフェイトちゃん？」

なのはがフェイトのほうに行くとフェイトが抱きつく

「えっ…！？どうしたのフェイトちゃん」

「スウェンはこの病院内にはもういない」

フェイトは驚くのはに手紙を見せる

「スウェン君がまさかそんな事がある訳ない」

なのははユーノに連絡を取る

「ユーノ君今すぐスウェン君のデバイス反応を割り出して」

「わかったよ…」

ユーノが調べると反応は海鳴市からだった

「ありがとうねユーノ君こっちの仕事がすんだらすぐ行くよ」
なのは、フェイト、スバル、はやては海鳴市へと急いだ

フェイト編 3 話拒絶

「急ぐか…」

スウエンは腹から血を出しながら目的地へと急ぐ

「見つけたよスウエン君!!」

「なのは一体何しに来た…」

「スウエン君どこに行こうとしてるの？」

「お前達には関係ない」

スウエンが言々とフェイト達も来る

「邪魔をするな…」

「スウエン君一体君に何が？」

「俺の前から消える!!」

スウエンは衝撃波をなのはに向けて飛ばす

「はあああああ」

突如現れたコウにより衝撃波は消される

「コウ君どうしてここにおるんや？」

「俺の任務はスウエンを捕まえる事だ」

「!!!」

その場にいる全員が驚く

「訳が分からないわかるように説明してよコウ!!」

「これは時空管理局の決定だよって貴様を逮捕する!!」

コウはジークフリートを向け言う

「なのは…どう言う事？」

「たった今通信できたよほら…」

なのはが見せるとそこには逮捕状が出ていた

「なんでスウエンが…」

「理由はわからないでもクロノ君達は危険と判断したんだ」

「でも理由ぐらい教えてくれても…」

「組織はそう言うもんだよフェイトちゃん何時でも最善な策を取る

それがかつての仲間だろうとね」

なのはもレイジングハートを構える

「でも私は…」

フェイトは悩む

「フェイトちゃんもしかしてスウェン君を助けようとしてるの？」

「だって私にとっては一番大事な絆だし私は何があるうとスウェンを信じると決めたから」

フェイトはバルディッシュをなのはに向ける

「それが答えなんだね…フェイトちゃん」

なのはもレイジングハートをフェイトに向けると同時に次元震が起きる

「クツ…遅かったか…」

「クロノどうしてここに…」

「何としてもスウェンを止めるアルハザードに行かせるな!!」

クロノの号令で魔導師が一斉にスウェンに狙いを定める

「待つてクロノ、スウェンと話をさせて…」

「ふざけるな!!これは全次元世界の問題なんだそんなことさせる訳には!？」

魔導師全員にバインドがかかる

「みんなは私達が止めるからフェイトはスウェンのほうに行きな」

「ありがとうアルフ、ユーノ」

フェイトはスウェンの前に来る

「なにをしに来たフェイト…」

「スウェンあなたがどこに行こうと私は待ち続ける」

「はなしはそれだけかなら失せる俺はもうお前の知っている俺じゃない」

「そんな事はどうでもいいよスウェンはスウェンだから私はいつまでも待ち続けるあなたの事を信じてるから…」

フェイトが言う光の壁ができる

「スウェン…私は待つてる必ず帰ってくるとだから…」

「フェイト…それじゃあな…」

「!？」

フェイトは魔力弾を撃たれ吹き飛ばされ、それと同時に光の壁は消え、スウエンの姿は消え、箱だけが残った。

フェイト編 4 話彼からの贈り物

スウェンが消えてから5日後の朝フェイトは目を覚ます

「ここは…」

そこは時空管理局の部屋の一室だった

「フェイト聞こえるか…」

「クロノここは一体？」

「そんな事は関係ない何故あんな事をした」

「それは…」

フェイトは黙りこむ

「あれ程、プライベートと仕事は分けると言った筈だ」

「でもスウェンをなんで追ってたの？」

「それは…機密事項だ」

クロノが言うとフェイトはクロノを睨む

「そんな訳のわからない命令を聞いてスウェンを捕まえるなんて無理だよ」

「フェイト時空管理局が信じられないのか？」

「理由を話してくれば信じられるかもしれないけど今はスウェンを信じる…！」

「その意思変える気はないのか例え捕まったとしても…」

フェイトは頷く

「そうか…わかったもう帰っていい」

「えっ私は捕まるんじゃないの？」

「いいから早く出るそしてここに行くんだ」

「ありがとう…クロノ」

フェイトはクロノにお礼を言い出て行く

「あなたにはがっかりですねえそれも家族愛ですか？」

「何とでも言え俺はフェイトの幸せだけは壊したくないだけだ」

「ですが作戦の第一段階は一応は成功しましたですから今回は大目

に見ましよう」

「俺はこの後どうすればいい？」

クロノが聞くと男はクロノに何かを渡す

「あなたはそれを誰のデバイスでもいいので入れてください」

「お前の目的はなんだ？」

「私の目的ですか全ての次元世界から魔導を消すことです」

「何の為に？」

「これ以上は今のあなたには言えませんそれではごきげんよう」

男は消えクロノは渡されたデータチップを見る

「フェイトちゃんこっちこっち」

「あれ…なんでなのはが？」

「実は渡すものがあつてね」

なのはは指輪を渡す

「あの…なのはは気持ち嬉しいけど受け取れないよ」

「フェイトちゃん何か勘違いしてない」

「これはなのはが私に渡す指輪でしょ」

「違うよこれはスウェン君が置いて行った指輪なの!!」

なのはが言つとフェイトは笑顔になる

「それ…本当？」

「当たり前だよそれと共にこの紙渡されたんだ」

「この紙？」

二人が見るととんでもない事が書かれていた

フェイト編 5 話脱退時空管理局

「時空管理局に戻るな…」

手紙にはそう書かれていた

「スウエン君何が言いたいのかな？」

「きっと時空管理局はもう敵の手に落ちてるそう言いたいんじゃないかな」

二人が話しているとコウとユーノが来る

「二人とも逃げるんだこの世界から」

「どう言う事？」

「元機動六課並びにその協力者に逮捕状が出てるんだ」

「そんなことありえるの？」

話していると周りを囲まれる

「囲まれたか…だがこの程度なら」

コウはジークフリートを地面に刺し地面に転移魔法を出し全ての魔道師を消す

「今の内に退くぞ…」

「でもどこに逃げるの？」

「海鳴市と言いたいけどどうせもう罠が敷かれてるできれば時空管理局が把握していない世界が好ましいな」

「それなら一つだけ思い当たる世界があるよ」

「それはどこフェイトちゃん？」

「確か次元世界エルガストだっけスウエンに連れられて一度だけ行ったんだ」

「そこならいいかもねなら急いで準備を」

ユーノが準備を完了するとエルガストへと飛ぶ

「ここがエルガストか確かに綺麗だし魔力もあるね」

「それでどこに行くんだ？」

「スーザン村に行こうと思う」

「わかった探してるからみんなは周りを警戒してくれ」
こうして時空管理局を抜けた4人の物語は始まるのだった

フェイト編 6話最初で最後の共同戦線

アルハザードスウエンは今そこに来ていた

「フェイト達逃げ延びてるよな…」

スウエンは空を見て言う

「最近アルハザードに来るのが多くないかしら」

「こつちだって好きで来てる訳じゃないそれにこの世界から異常な怪電波が出るんだ何か知らないかプレシア？」

「相変わらず態度が悪いわねスウエン？」

「うつ… すいません」

「まあいいわその怪電波ならアリシアが分かる筈よ」

「アリシアもう動けるのか」

スウエンが聞くとアリシアが抱きつく

「スウエン久しぶり！！」

「ああ、元気だったかアリシア」

「私は元気だよでも何しに来たの？」

「ミッドチルダにこちらから怪電波が送られているからその原因を調べにきたんだ」

スウエンが言うとアリシアはスウエンをじっと見る

「どうかしたのかアリシア？」

「ねえスウエンもしかしてフェイトと喧嘩した？」

「いや別に喧嘩してないけどどうかしたのか」

「いや喧嘩してないなら別にいいんだけどさ」

アリシアが言うとか何か威圧感が近づいてくる

「なんでこんな場所にスサノオが…」

スウエンが言った通りスサノオが姿を現す

「奇遇だなこんな場所で巡り合うとは」

「スサノオ貴様何しに来た」

「どうやら貴様の狙いと我の狙いは同じらしいな」

「何だと…」

スウエンはクライスダストをしまいスサノオを見る

「我の狙いはクルスの撃破だそして貴様の狙いはこの怪電波を消す事だろ？」

「何故それで目的が同じになる？」

「簡単な事だこの怪電波はクルスが出している」

「つまりはクルスを消せば怪電波も止まるそう言う事が」

スウエンが言うとスサノオは笑う

「そこで今回は一時休戦し共同戦線と行こうじゃないか」

「なら条件がある」

「何だなんでも一つだけ聞いてやる」

「俺の仲間を傷つけるな！！」

スウエンが言うとスサノオは頷く

「では交渉成立だ最初で最後の最強タッグさて始めるか」

「だがお前がピンチになろうとも助はしないからな」

「平気だ我は自分の身は自分で守る貴様こそ殺されるなよ」

「俺はまだ約束があるこんな場所じゃ死ねはしない」

二人は怪電波の出てる場所へと急ぐ

フェイト編 7話エルガストへ…

「おいこれからどこに行く気だ」

「怪電波が発生しているのはここだけではないそれに全ての世界の怪電波を止めなければこの世界の怪電波は止まらない仕組みだから」

スサノオが言うのアリシアが来る

「どうしたんだアリシア？」

「はい、お弁当」

スウェンとスサノオにアリシアはお弁当を渡す

「ありがとうなアリシア！」

「何故に我にまで…」

「何かお父さんの感じがしたからかな？」

「そうか…一応貰っておこう」

スサノオとスウェンはエルガストへと向かう

「どうしたんだスサノオ？」

「これが人の優しさと言うものなのか？」

「そうだなそうかもな」

「そうか…戦いだけが生き甲斐だったがこんな生活もいいのかもな」
スサノオが言うと目の前に光が出る

「さあ着いたな…」

「スウェン！！」

スウェンが後ろを振り向くとフェイトが抱きつく

「でもなんでスウェンがスサノオと一緒になんだ」

「色々あつてね今は協力してもらってる」

「それが貴様の言う大切なものか」

「まあなお前にもあるだろ大切なもの」

スウェンが聞くとスサノオは剣を出す

「どうしたんだスサノオ」

「来る…」

スサノオが言うとなんか落ちてくる

「久しぶりでも言うべきかな皆さん」

「お前は…メシア何故こんな場所に？」

「面白そうなゲームだから僕も協力させてもらおうと思ってね」

「遊びじゃないんだぞメシア」

スサノオが言うとなんかメシアは笑う

「それとスウェンとフェイトにノルンから贈り物だ」

「中身は聞いたんだろ」

「なんでもこれからの戦闘には絶対必要なものだっさ」

スウェンとフェイトは受け取りデバイスに装着する

「急ぐぞ怪電波の原因まであと少しだ」

新たにメシアを仲間に加えるのは達は向かう

フェイト編 8話いつまでも…

「あれが怪電波の原因だ」

「ずいぶんでかいね」

「それに魔力ダメージは一切効かない例えなのはバスター3スターライトブレイカーでもね」

「そこまで言わなくても…」

なのはが落ち込むとスサノオは剣を出し斬りかかる

「刻異無限斬！！」

スサノオが切り裂くと中からスサノオが現れる

「なにこれ…」

「やはりかクルスの考えそんな事だだがそんな子供だまして我は退かん」

スサノオが斬りかかると消える

「あれって幻影？」

「その類だろうな」

コウは何かを食べながら言う

「でも平気かスサノオ」

「我を誰だと思っっているそれにこの程度の策我の前では無意味だ！！」

「ひゅー凄いさすがはスサノオだね」

「メシア貴様死にたいか？」

スサノオが睨むとメシアは怪電波装置の残骸を見る

「ずいぶんと派手に壊したもんだなスサノオ」

「我は加減を知らないからな」

スサノオは剣をしまいスウェンを見る

「あれからどれぐらい強くなったのか貴様の实力が見たいな」

「ああいいぜなら次の装置は俺が壊してやる！！」

「そこまでだ反逆者ども」

「案外早かったねクルス」

スウエン達が見ると時空管理局の魔導師を従えたクルスがいた
「ほう、あなたがスウエンですか」

「お前がこの元凶を起こしてるクルスか…」

スウエンはクライスダストを構える他のみんなも構える

「そんな物騒なものはしまつて話し合いをしましょうよ」

「断る！！」

スウエンが言うとかルスは笑いフェイトへ向かう

「遅いんだよ！！」

「何故私の行動が…」

スウエンはクルスを斬る

「あなたはいずれ私が手に入れます絶対にね」

クルスは消える

「何かスウエン君って人気だね男の人に」

「ぶっ…気持ちが悪い事を言うな」

「赤くなつてかわいい」

「それより次の場所に急ぐぞ」

次の怪電波を壊す為に急いだ

フェイト編 9 話新たな力

「おい、コウ何食べてるんだ？」

「携帯食料だお前も食うか？」

「いや結構だ」

スウェンが言うとスサノオとユーノが話していた

「貴様の状況分析能力は凄いな」

「あなたも初めて会った時に放っていた気迫を感じませんか？」

「我自身も驚いている戦いだけが生き甲斐だったのにこんな事になつてしまつてな」

スサノオはアリシアからもらったお弁当を食べ始める

「これが人の優しさか…」

「あなたも誰かを愛せばきっと人間の心の素晴らしさに気付くはずですよ」

「我はもしかしたら戦いのない生活をしたいのかもしれない」

「今のあなたならできますよ」

ユーノが言うとスサノオは空を見る

「貴様も誰か守るものがあるから戦うのか」

「僕には戦う力はないでも大切なものを守りたいからここにいるんだ」

ユーノは皆を見て言う

「そうか…すまなかつたなこんな戯言を聞かせて」

「いえあなたにもできるといいですね守りたい人が…」

ユーノはそう言うと皆のほうへ行く

「どうした戦いの神とまで言われたお前が何か迷いごとか」

「メシア、貴様は奴らに敗れたんだつたな」

「うつ…それは言つなよ…でもあのときのスウェンやフェイト達は凄かつたな」

「ならば行くか…」

とうとう目の前に二個目の怪電波発生装置が現れる

「今回は俺の番だよな」

「いや我が行く」

「なに言ってるんだよ」

「頼む我のわがままを聞いてくれ」

スウエンは黙って下がる

「済まないな」

スサノオは剣を出し幻影と戦う

「グッ」

「スサノオ!!」

「来るな我は今新しいものを掴もうとしてるのだ!!」

スサノオが言うとき空が光り何かが落ちてくる

「ようやくわかりましたかスサノオ」

「どこにいるんだノルン!!」

「守る物のない力はただの暴力ですが守るために振るう力はその人の思いそのものです」

「なるほど貴様らしい物言いだなノルン」

スサノオが言うときノルンは笑う

「もうあなたは掴んでいます後はその思いを具現化するだけですよ」

「これが思いの力が悪くはないな行くぞ…ルシファオン!!」

スサノオは新たな力を持ち幻影をねじ伏せる

フェイト編 10 話新たな道

あれから10日後全ての世界に置いてあった装置は壊れ今アルハザードに来ていた

「本当にいいのかスサノオ」

「我はこの二人を守るために力を振るう」

スサノオはアリシアとプレシアを見て言う

「そうか…じゃ戦いの件は…」

「もう我は世界など賭けず真剣に貴様と勝負がしたいクルスを倒したら改めて決闘してくれるか」

「ああ、いいけど俺だってそう簡単には負けないからな」

「二人とも準備いいそろそろ行くよ」

なのはに呼ばれスウエンとスサノオは向かう

「いよいよ時空管理局との全面対決だね」

「問題ない」

「我の道を阻むものは排除するだけだ!!」

「よし…行くぞ!!」

スウエン、スサノオ、なのは、ユーノ、メシア、フェイト、コウはミッドチルダへと着く

「ようやく来たな皆…」

「はやてか…」

コウが言うとはやてが前に出る

「邪魔をするなはやて!!」

「うちの仲間になれば戦わずに済むで」

「俺は悪には力を貸さん」

「なら死ぬんや!!」

はやてが魔力砲を放ちとスウエンはデバイスを回転させ魔力砲を消す
「はやて、俺が相手をしてやる!!」

スウエンが言うとかウが止める

「はやては俺が止める」

「なら私はスバルとティアナ」

「私はエリオとキャラ」

「なら僕はその他の魔導師の相手をしようかな」

全員戦闘態勢に入り戦いが始まる

フェイト編12話大切なものを取り戻す為に

「スウエン、スサノオここは僕達に任せ君達にはやくクルスのもとへ行け」

「だが皆を正気に戻すなら俺たちも手伝った方が…」

「いや我らは一刻も早くクルスを倒した方がいい彼らを気絶させただけで正気に戻るかは分からないからな」

スサノオに言われスウエンは先を急ぐ

「2対1そんなのでも勝てるの？」

「勝てるかじゃないやるしかないんだ！！」

「そつだよ諦めさえしなければ不可能なことなんてないんだから」

「俺がはやての為にできるのはこれぐらいだならせめて助けたいと思うからな」

コウが言うとうィータのハンマーが振り下ろされる

「まだ認めた訳じゃねえがはやてを助ける為だ今は手を貸してやる」

「そう言う事だテストロッサ行くぞ」

「フェイトも私もいるよ」

「彼に頼まれてきてみればなかなかいい場面だったようだね」

ヴィータ、シグナム、アルフ、スカルエツティが来る

「シャマルとザフィーラはスウエンの手伝いに向かった」

「後はヴァイスそれにギンガか」

「でもどうしてここに？」

「彼に頼まれたから私が彼女たちをかくまったのだ」

スカルエツティが言うとうィータが殴りかかる

「今までの私だと思ってもらっては困るな…」

「！！」

スバルが驚くと何とスバルのデバイスに亀裂が入って行く

「どうしたそれほど驚く事でもないだろう君達のデバイスは私には無意味だ」

スカルエツティが言うところ今度はエリオとティアナの連携攻撃が来る
「当たれば強力なのだろうが私には効かない」

スカルエツティは二人のデバイスを持ち粉々にする

「これが私が君達と戦い学んだ秘策だ。何も戦闘不能にすればいいんだならデバイスを壊すのが一番手っ取り早い」

「確かにそうだけどデバイスはそんじゃそこいらの攻撃じゃびくともしない」

「それに下手に握りつぶそうとすれば自分がやられかねない」

フェイトとユーノが言うところ空管理局の中で爆発が起きる

「早く行きたまえここは私達に任せ君たちは彼の援護を」

スカルエツティが言うところコウを残したのは達は侵入する

「君は何故残る？」

「大切なものを取り返す為だ」

「ならば彼女には手を出してはしない君個人の力で頑張るのだな」

コウはただ一人ではやての前に立つ

フェイト編 13 話守るために散る命

「見つけたぞクルス」

「貴様に逃げ場はないおとなしく観念するんだな」

「私が何の考えもなしにこんな場所にいるとでも思ったのですか？」
クルスが笑うと時空管理局のあっちこっちで爆発が起きる

「クルス…貴様ああ!!」

スウエンは魔法を唱えようとするが発動しない

「無駄ですよスウエンさアおとなしく最期を迎えなさい」

クルスが魔力砲を撃つとスサノオが盾となる

「平気か…スウエン」

「スサノオなんで俺を庇った？」

「貴様は死んではならない貴様を死なせば悲しむものがある」

スサノオが言うとき来栖は笑いながらスサノオとスウエンに向けて魔力砲を撃とうとする

「戦いの神と恐れられたスサノオがまさかこんな風に最期を迎えるとは傑作ですねえ」

「我を笑つかそれもいいだが我にとって己の宿命を忘れた訳ではない」

「あなたに何ができるのですか死にかけのあなたに!!」

「我が初めて触れた優しさそれを壊すもの全てが我の敵だ!!」

スサノオが言うとき傷が回復していく

「貴様死に底ないの分際で!!」

「我を阻む事貴様では不可能だ!!」

スサノオは魔力砲を消しクルスを掴む

「今こそ我が使命果たす時だ」

スサノオの下に魔法陣が何重にも発動される

「スサノオ…何をする気だ止めるおおお」

「さらばだ…スウエン貴様との決着つけたかったがな!？」

スサノオが魔法を発動すると同時にクルスはスサノオを刺す

「あなたと心中などする気もありません地獄へはあなた一人で行きなさい」

「我は何もできずただ唯一の繋がりだった彼女達すら守れないのか……」

スサノオは倒れそのまま息は途絶える

「スサノオ…お前が守りたいものの必ず俺が守るだから少しだけ力貸してくれ…」

スウエンがスサノオに触れるとスサノオの中から光が出てスウエンのデバイスの中に入る

「俺は貴様を許しはしない人をもてあそぶ貴様はな!!」

「あなたが私を倒すそんなことできる訳がないでしょう」

クルスが笑うとスウエンの目から血が出てスウエンの姿が変貌する

フェイト編 14 話を賭けた最後の死闘

フェイト達は壊れた時空管理局の中を登って行く

「今…スサノオの放っていた気が消えた…」

ユーノが言っていると皆はスピードを上げてスウエンのもとへと急ぐ

「どうやらスサノオは負けたようだね」

「だがこちらはどうかになった後は彼らに全てを託すでしょう」
スカルエツティとメシアは言う

「何者だ貴様…」

「俺は魔導師だ」

「そんなばかでかい魔力を持つ魔導師など聞いたことがない」

クルスが言っているとスウエンは自分自身のデバイス『クライスソウル』
を握りクルスを見る

「俺はあの時にすでに人間とは違う存在になっていたのかもしれない」

「そうだ貴様は化け物だ魔導師などではなくな…」

「だがこの感情は俺が人間である唯一の証拠だ」

スウエンが言っているとフェイト達が来る

「ならばその思い私が砕いて差し上げよう」

クルスはフェイトに向けて魔力砲を放つ

「俺はもう誰も失いたくない!!」

スウエンが言っているとフェイト達をバリアが包む

「スウエン…」

「すぐに終わるいや必ず終わらせる」

「まだ私を倒そうと考えているのですか」

「それが俺が唯一スサノオにできる事だからな…」

スウエンが言っているとメシアが来る

「僕の力も使えそうすればあいつは倒せるさ」

「済まないノルン今は力を借りる!!」

ノルンと融合すると片目が銀色、片目が金色になる
「クルスお前の最期だ！！」
スウェンがクライスソウルを刺すと光になり消える

フェイト編 15話世界でただ一人

「ハアハア終わったのか？」

「奴の感じはもうしない」

メシアが言うとスウエンの姿がもとの姿に戻る

「さすがに疲れた」

「まあ無理もないだろうあれだけの大魔力を放出したんだからな」

「メシアが力を貸してくれなきゃ負けてたよ」

「僕も君と出会ってスサノオ見たく人間の可能性を信じてみたかったからな」

メシアが言うとフェイトやなのは達が来る

「スサノオさん死んじゃったんだ」

「俺のせいだなだが俺がスサノオにできるのはこれぐらいだけだったからな」

スウエンはスサノオの傍に行き動かないスサノオを見る

「できればあんたとの決着つけたかったな」

スサノオの目を閉じスウエンはなのは達と共に時空管理局を出る

「フェイトもう平気だ」

「スウエン無理はしないでね」

フェイトが言うと空が裂けその奥には現れるはずのないものが現れた

「あれは…アルハザード何故あれがあそこに？」

スウエンが疑問に思うと凄い魔力がスウエン達を襲う

「グッなんて魔力だ」

「こいつはやばいかもなこっちは能力を使いきっている今ここでクルスが復活でもしたら…」

メシアが言うとスウエン以外の魔導師がどんどん引き寄せられていた

「なにが起きてる？」

「僕に聞くなだがとんでもない事が起きている事だけは確かだな」

メシアが言うつなのはやフェイト達まで吸い込まれていく

「メシアあれを止める方法ないのか？」

「そんな方法ある訳ないだろそれに僕達は吸い込まれない」

メシアがそう言うと言つとアルハザードが崩壊し中からノルンが現れる

「時間がありません！ スウエン、メシアあなた達が最後の希望です
必ず彼を止めてください……」

「ノルン訳が分からないもう少しわかりやすく説明しろ」

「あなた達に託せるこれが最後の力です……」

ノルンはスウエンにある宝石を託し他の魔導師と共に消える

フェイト編 16話守りたい人々

「そんな…フェイト達の気配が」

「彼女達だけじゃないこのミッドチルダにいるのはもう僕達だけだ」
メシアが言うとは何者かが降りてくる

「クルス…貴様」

「今の私にはあなたでは勝てませんこの世界の真理に触れた私にはね」

クルスが言うときスウェンはクライスソウルを出しクルスに斬りかかる

「止める今無駄に魔力を消費するな」

「だがこいつを止めなければいずれは全世界が…」

「あいつはノルンや他の魔導師を吸収しているんだそんな奴に勝てると思ってるのか」

「俺はまた大切な人を守れないのか…」

スウェンが言うときクルスはスウェンへ歩み寄る

「これが私とあなたの差ですいい加減に観念しなさい」

「俺は必ず彼女たちを救いだす例えこの身が砕け散ろうとな」

「わかりませんね。他人の為に自分の命を賭ける理由が」

「フェイト達と過ごしわかったんだ人は誰かを守る時に無限大の力が出せると…!!」

スウェンが言うときクライスソウルが光りその場に落ちているデバイスがスウェンのもとへと集まる

「フェイト、なのは、クロノ、はやて、コウそしてみんな俺に今一度だけ力を貸してくれ!!」

スウェンが言うとき全てのデバイスが一つの光となりクライスソウルの中へ吸い込まれる

「なるほどなそれがあなたの答えですか」

「そうだこの力こそ俺の全てだ!!」

スウェンが言うときメシアと融合した時見たく羽が生えるだがその羽

はノルンと同じ白い羽だった

「クルスお前を倒す為なら俺は人間ではなくもとの俺に戻る」
スウェンが言うと背中から光が放出される

「それが本当のあなたですか」

「そうだ皆から忌み嫌われた姿だ」

スウェンが言うと同時にクルスは苦しみだす

「貴様まさか…ノルンとの同調をしてるのか」

「クルス俺の大切な人たち返してもらおうぞ」

スウェンがクライスソウルを刺すとクルスは消えフェイト達が戻ってきた

フェイト編最終話同じ道の上で

あれから一週間ノルンとメシアは消えスウエンやフェイト達はもとの生活へと戻っていた

「スウエン」

「フェイトどうしたんだ？」

スウエンが聞くとフェイトはスウエンに何かを渡す

「はい。誕生日ケーキだよ」

「フェイトに俺の誕生日なんて言っただけ」

「ユーノから聞いたんだよスウエンを驚かせる為にね」

フェイトは笑顔で言う

「ありがとう…フェイト」

スウエンもお礼を言うとはやて、ユーノ、コウ、なのはが来る

「スウエン君それ何？」

「わかったバースディケーキやな」

「スウエン君きょう誕生日だったんだ」

なのはが驚いてるとユーノがスウエンに近づく

「なるほどねフェイトが聞いてきたときはなんでかなと思ったけど

こう言う事が」

ユーノが言つと時空管理局へと着く

「それじゃスウエンまた後でね」

「ああ、後でな」

スウエンはなのはと共にいく

「それにしてもスウエン君アツアツだね」

「なのはとユーノもうまく行っているんだろう」

「まあ一応はね…」

なのはと話しているとスバルが来る

「おはようございます」

「相変わらず元気だなスバル」

「まあ元気が一番だけどね」

なのはが笑いながら言う。スバルがスウェンとなのはにタイ焼きを渡す

「なんだこれ？」

「何ってタイ焼きですよ」

「見ればわかるけどなんでタイ焼き？」

「今ミッドチルダだとちょっとしたブームなんですよ」

スバルが言うとエリオが来る

「すいません兄さんそれとなのはさんキャロ見ませんでしたか？」

「いや見てないな」

「ごめん私も知らない」

「そうですかありがとうございました」

エリオはキャロを探しに行く

「それじゃあなスバル」

「はい仕事頑張ってくださいね」

スバルに見送られスウェンとなのはは部屋へと入る

「でもこのタイ焼きどこで売ってるのかな？」

「スカルエツティやナンバーズが売っているんだ」

スウェンが言うとなのはは驚く

「それどういう事？」

「昨日そう言えば広告が入ってたなと思ってな」

「そうなんだ…」

なのはが言うとセイが来る

「失礼しますこれを渡せと言われたので渡しに来ました」

「済まないなセイ」

「いえお構いなくこの後少々うるさい馬鹿が来ますが無視して結構です」

「その言い方酷いな僕だって人間なんだぞ」

セイとライはいい争いを始める

「そう言えばヴィヴィオは？」

「ヴィヴィオならスウェン君の後ろにいるよ」

「え“っ”」

後ろを振り向くと確かにヴィヴィオがいた

「スウェンパパ大好き!!」

「ヴィヴィオ離れる君のお父さんはユーノだろう」

「えゝパパとママはヴィヴィオには二人いるんだよ」

「何だよそれ…」

スウェンが言うと呼び出しが聞こえスウェンはクロノのもとへ向かう

「どうかしたのかクロノ？」

「スウェン君の体に異常はないのか？」

「まあ一応はな」

「ならいいがスウェンの体は身体検査だけじゃわからないことだらけなんだから無理はするな」

スウェンはクロノに言われ出て行く

「さて仕事に行くか」

なのはのもとへ戻ると大変なことになっていた

「なのは何を遊んでるんだ？」

「違うよ助けてよ」

何があつたのか知らないがヴィヴィオとセイ、ライがなのはを囲んでいた

「セイ、ライお前達そう言えばヤミはどうした」

「死にました」

「階段から落ちてな」

二人が言うエクスカリバーが飛んでくる

「我を勝手に殺すとはいいい度胸だな」

「なにを言っているだゝ冗談に決まってるじゃないか…」

「そうですよそんなこともわからないとは本物の馬鹿ですか」

「我は馬鹿ではなゝい」

ヤミは再びエクスカリバーを撃とうとするとスウェンに止められる
「頼むからこれ以上壊さないでくれ」

「仕方ないなマスターの命令ならしたがおう」

ヤミはしまいセイとライを連れ出て行く

「ようやく仕事に行けるな」

「そうだね」

なのはとスウェンは仕事へと向かった

番外編1話スウェンとなのは（前書き）

番外編は全10話です

番外編1話スウェンとなのは

とある日の日曜日スウェンはいつものように起きてご飯を食べていたただ一つ違うのはヴィヴィオとなのはがいる事だった

「おいしいねヴィヴィオ」

「そうだねなのはママ」

二人は笑いながら言うスウェンは黙々と食べ続ける

「何か言つてよ」

「そうだよパパ」

「じゃあなんでここにいるんだ」

スウェンが聞くと昨日の事を話す

「そうか…皆で集まって飲んだ後なのはがよって俺が連れてきたと
そう言う訳か」

「そうだよ大胆なことしたよねフェイトちゃんじゃなくて私なんだ
もん」

「スウェンパパなのはママと結婚したいの？」

「そう言う訳じゃないが…」

スウェンが言いかけるとチャイムが鳴る

「今出るね」

「止めるーなのは!!」

スウェンは止めるが遅くドアの前ではフェイトが待っていた

「スウェンどうしてなのはと一緒にいるの？」

「これには訳が…」

「スウェン君が私を昨日連れてきたんだよ」

「そうなんだ…」

フェイトはドアを閉め遠ざかって行く

「なあこれは俺が悪いのか？」

「当たり前だよ…完璧に誤解してるんじゃないフェイトちゃん？」

「なのはお前はユーノに誤解されたままでもいいのか」

「私は別に平気だよそうだったらスウエン君と結婚すればいいだけだから」

なのはが言うとスウエンはため息をつく

「ハア、どうやって誤解を解くかな」

「いつその事私と結婚する？そうすれば悩む必要もないよ」

「いやそれじゃ解決にないだろうそれにユーノが好きなんだろ」
「今でも私はスウエン君も好きだよ」

なのはが笑顔で言うとスウエンはヴィヴィオを見る

「ヴィヴィオはユーノと俺ならどっちにお父さんになってほしい？」

「スウエンパパー！」

「ほら、ヴィヴィオだって納得してるし平気だよ」

「だが高町家が問題じゃないのか」

スウエンが言うとなのは紙を出す

「ここに書いてあるよスウエン君とも結婚はできますよって……」

「なんでそんな事が……」

スウエンが頭を押さえるとなのはは笑う

「それ本気じゃないだろうな……」

「えっ……でも海鳴市のほうじゃ私とスウエン君結婚してる事になってるから」

「意味が分からねええ」

「だから別に結婚しようとは問題はないんだよそれにユーノ君とフェイトちゃんいいペアだと思うし」

なのはが言うと電話が来る

「ハア、出るのが怖いな……」

スウエンが出るとフェイトからだった

「どうしたんだフェイト……」

「明日暇かな？」

「一応暇だけどどうかしたのか？」

その後約束をしてスウエンは電話を切る

「今の話の内容からするとスウエンくん嫌われたね」

「スウェンパパ、フェイトママと離婚？」

「いやヴィヴィオはまだ結婚してないから…」

「それじゃ絶交？」

ヴィヴィオに聞かれスウェンは背筋が寒くなった

番外編2 話距離を置く二人

あれから一日後スウエンはフェイトと約束をした場所へと来た

「会うのが怖い…」

スウエンが考えてるとフェイトが来る

「ごめんね待たせて」

スウエンは何もしゃべらない

「それじゃ行こうか…」

「ああ」

スウエンとフェイトはある遊園地へと入って行く

「確かあそこってスウエン君とフェイトちゃんが初めてデートした場所だね」

「別れ話をするにはもってこいの場所やな」

なのはとはやてが言うつとヴィヴィオは訳が分からず首をかしげる

「スウエン覚えてる？」

「何をだフェイト？」

「ここで約束した事だよ」

「あのときの約束か…」

スウエンが言うつとフェイトは涙を流す

「どうしたんだフェイト」

「ごめんねスウエンもう無理かな…」

フェイトはスウエンの前から走り去る

「あゝあ振られちゃったねスウエン君」

「見てたのか…なのは…」

「まあ落ち込まないでよまだ君の事をわかってくれる女性がいるつて言うつかスウエン君は時空管理局ないじゃ人気なんだから誰でも結婚してくれるよなんなら私でもいいけど…」

なのはが言うつとスウエンはフェイトの走っていた方向に向かう

「ずいぶんと一途だね」

「でもあれぐらいのほうがええやろコウ君はそんなにしゃべらんしな」

はやてが言うとなのはも後を追跡していく

「どこにいるんだフェイト…」

スウエンはあたりを見渡しながら言う

「駄目か…俺はもう完全に嫌われたんだな」

スウエンが諦めるとフェイトの声が聞こえる

「フェイトの声こっちからか」

スウエンが向かうとユーノと一緒にいた

「ごめんね遅れてユーノ」

「僕の方こそごめん急に呼び出して」

「でもなのはいいの？」

「もういいんだあんな冥王と一緒になんて僕には耐えきれないからね」

ユーノが言うとなのはは倒れる

「それじゃ行こうか二人に気付かれる前に…」

「そうだね…」

ユーノとフェイトはどこかへと行く

「振られたんはスウエン君だけやなかったんやな」

はやてに笑われスウエンとなのはは帰った

番外編3話長期休暇

「コウ…スウエン知らない？」

「いや見てないが…」

「コウが言うとなフェイトは寂しそうな顔をして時空管理局内に入る

「あつ…スウエン…」

「フェイトは声をかけようとしたが止めた

「スウエン君今日から長期休暇取るんだって」

「一応海鳴市に行こうと思う」

「そうなんだそれじゃ私も行こうかな」

「二人は楽しそうに話しながら時空管理局を出て行く

「スウエン楽しそうだったな…」

「フェイトはスウエンの事を気にしながら仕事へと戻る

「ふう…これでいいだろう」

「スウエン君荷造り終わった」

「ああ、一応な後は…」

「スウエンは何かをした後外へと出る

「さて行くかデイメンジョンホール」

「スウエンが魔法を唱えると懐かしい風を感じる

「久しぶりだな海鳴市なんて…」

「そうだねスウエン君」

「なのははスウエンに抱きつく

「離れるなのはは」

「別にいいじゃん海鳴市なら私達は夫婦なんだから」

「なのははスウエンを見て言う

「でも誰も知らないだろ」

「へっすずかちゃんとアリサちゃんは知ってるよ」

「まじですか」

「スウエンが言うとなフェイトも来る

「あつそれとついでにヴィヴィオは私達の子供と言う事になってるから」

「年齢的におかしいだろ」

「細かい事は気にしない」

「そうだよスウェンパパそれともヴィヴィオのパパがやなの？」

ヴィヴィオに言われスウェンは別にそんな事はないという顔をする

「それじゃ私達の実家へゴーゴー」

「なんかやけになのはテンション高いな…」

「うんなのはママじゃないみたい」

スウェンとヴィヴィオはなのはの後について行く

番外編 4 話久しぶりの風

「ただいまお父さん、お母さん」

「お帰りなのはそれにスウェン」

「あらヴィヴィオもいるのね」

桃子と士朗に言われスウェン達は部屋へあがる

「何か懐かしいねこの部屋」

「そうだな…」

「どうしたのスウェンパパ元氣ないね」

「いや別に平氣さ何でもない」

スウェンは悲しそうな眼をしながら空を見上げるその頃フェイトの家

「ふう〜疲れたでもスウェンとなのは何時の間にあんなに仲よくな

ってたんだろう?」

フェイトは考えながらビールを飲む

「私もしかしたらスウェンに嫌われたのかな…」

フェイトはスウェンに電話しようと留守番電話が入っているのに気づく

「この電話番号はスウェンから?」

フェイトは電話を聞くと急いで家を飛び出し海鳴へと急ぐ

「なのはちゃんとスウェン君元氣そうでよかった〜」

「すずかちゃんも全然変わってないね」

二人が話しているとアリサが来る

「二人とも何時の間に結婚なんてしたのよ」

「さすがに情報が早いね〜」

なのはが言つとスウェンは二人を見る

「どうしたのよスウェン」

「いや何でもないそれより俺は用事を思い出したじゃあな皆」

スウェンは手を振りどこかへと転移する

番外編5話仲直り？

スウエンは公園に来ていた

「フェイト聞いてくれたかな」

スウエンが待っているとフェイトが来る

「ごめんねスウエンあのときは急にユーノに呼ばれたからさ」

「俺の方こそ勝手にいろいろ考えて何も言わずに海鳴に来ちゃって」
スウエンが言うとフェイトはベンチを指さす

「初めて会ったときもこのベンチに座ったよね」

「俺は最初フェイトの事をアリシアだと思ったしね」

「私もスウエンを見たときなんか懐かしい感じがしたんだ」

フェイトは笑う

「でもフェイトがアリシアのクローンだと知った時は驚いたな」

「私が倒れた時スウエンは私にずっと念話を送ってたよね」

「二度と俺の目の前で大切なものを無くさないためさ」

「あのとき嬉しかったそれから闇の書事件で私達の敵にまわりはやてを守ったよね」

フェイトが言うとスウエンは下を向く

「別に怒ってる訳じゃないよそれに最終的には私達と一緒にリインフォースと戦ったしね」

「ありがとうなフェイト」

スウエンが言うとフェイトは顔を赤くしながらスウエンに言う

「スウエン結婚式はいつにする？」

「いきなり何言ってるんだフェイト」

「やっぱり私じゃなくてなのはのほうがいいの？」

「そう言う訳じゃないが…何と云うかあの…その」

スウエンは顔を赤くして言う

「本当に俺でいいのかアリシアの頃の記憶じゃなく今のフェイトの想いだぞ」

「私の想いに偽りはないよスウェン今も昔もね」

フェイトが言くとスウェンはフェイトに渡す

「この綺麗な羽をなんなの？」

「ノルンから受け取ったプロポーズの証なんだとよ」

スウェンが言くとフェイトはスウェンにキスをする

「スウェン大好きだよ！！」

「フェイトこれからもよろしくな」

二人はその後しばらくベンチに座っていた

番外編 6話 いろいろな事情（前書き）

番外編 5話から2ヵ月後の話です

番外編 6話 いろいろな事情

「今日の訓練はここまで各自、今回の事をまとめて俺かなのはに見せるように」

スウエンが言うのと訓練生たちは元氣良く頷く。スウエンは落ちているごみを拾い自分の仕事場へと戻る

「どうだった。今回の訓練生たちは？」

「呑み込みが早いのは助かるが逆にすぐにそれを試そうとするのだけは止めてほしいな」

「にやはは仕方ないよ。やっぱり好奇心には勝てないんだから」

「でもなあ、今のままじゃ危なくって実戦には出せないな」

スウエンとなのはが話していると訓練生の一人が来る

「失礼しますチーム のレッカ・ザンです。レポートを見せに来ました」

「ずいぶんと早いね」

「レッカ、お前はもう実戦でも通用するのになんで訓練生のままなんだ？」

「私はまだ弱いですしそれに…」

レッカは顔を赤くするなのははそれを見ると笑顔になりレッカに近づく

「確かに君の戦闘スキルは他の人を抜いて訓練生の中じゃトップクラスだね」

「はい。ありがとうございます」

「それじゃ少しだけ話が聞きたいから付いてきてくれる？」

「はい…了解しました」

なのははスウエンに後の仕事を押し付けレッカと共に部屋を出て行く
「それじゃまず聞きたいのは君はスウエン君に恋をしてるね」

「えっ…いや別に…」

レッカの顔は赤くなる

「隠さなくてもいいよ。私も好きだからね」

「えっそうなんですか。いつも一緒にいるからもう夫婦だと思ってました」

「そう思われても仕方ないよね。名字が同じだから…」

「それじゃ兄妹なんですか？」

「レッカが聞くとなのはは寂しそうな顔になる

「血縁関係も何もないよただの友達だからね」

「つまりたまたま名字が同じだけですか？」

「私が住んでいた地球だとスウェン君は私と家族なんだよ」

「それってつまりこつちの世界では何の関係もないけど向こつちの世界だと家族そう言う事ですよね」

「レッカが言うとなのはは頷く

「それに今スウェン君はフェイトちゃんと付き合ってるしね…」

「そうだったんですか」

「やっぱり知らなかったんだね。だから安心して本局の魔導師になるといいよ」

「なのはが言うとレッカはなのはを見る

「私、本局の魔導師になつてなのはさんの部下になりたいです」

「スウェン君じゃなくて私でいいの？」

「はい！！」

「レッカが元気よく言うとスウェンが来る

「なのは、レッカもう今日はこないし3人で何か食べに行くか」

「えっでも何の祝いでもないよ」

「まあいいじゃねえか細かい事はよさあ行こうぜ！！」

「なのはとレッカは訳の分らぬままついて行く

番外編 7 話届かない思い

「さあ着いたぜ」

スウエンに連れられなのはとレッカはミッドチルダの中でも一、二を争う高さのレストランへと来ていた

「なんでこんな場所に…」

「いいから入れよ」

「でも私まだ未成年ですよ」

「平気だ俺も酒は飲めないからな」

スウエンは笑顔で言うと言員の傍にいく

「本当はフェイトちゃんと来ようとしてたんだよね」

「多分そうでしょうね」

レッカが言っているとスウエンが戻ってくる

「さあ行くぞ」

「あつ…うん」

二人はなかなか言い出せず席へと着く

「それではご注文がお決まり次第こちらのボタンでお呼びください」

「わかりました」

スウエンはお礼をしてメニューをなのは達に渡す

「ほら二人ともメニュー」

「ありがとう…」

二人はメニューを見ながらちらちらスウエンのほうを見る

「どうしたんだ。俺の顔に何か付いてるか？」

「いや、そうじゃないけど」

「じゃあどうしたんだよ？」

スウエンが聞くと二人はメニューで顔を隠す。スウエンは訳の分からないまま首を傾げる

「それより注文するもの決まったか？」

「うん…一応」

二人が言うとスウェンは店員を呼び注文する

「俺は酒は飲めないけどなのはは飲めるだろ？」

「うん平気だけど……」

なのはが言うとスウェンはなのはに紙を渡す

「ここのお酒はドリンクバーと同じだからなそのチケットを見せれば無料で飲み放題だぜ」

「そうなんだ……」

なのはは席を立ち向かう

「レッカは本局の魔導師になる気はないのか？」

「一応あります」

「ならもう訓練生じゃなく魔導師になる為の試験受けるよ」

「でもまだ私は本来の魔導師見たくあんなにうまく戦えないし何よりスキルがまだ駄目駄目ですから」

レッカが言うとスウェンは紙を出す

「俺となのはの推薦状だそれだけ期待されてるんだぜ」

「でも……私はまだスウェンさんやなのはさんに教わりたいです」

「一つ言っとくけどな俺たちの本来の仕事は時空管理局の魔導師の教導だぜ」

「そうだよ……それに訓練生の時よりも私達と会う機会も増えるしね」
なのはが言うとレッカなのはの持ってきたお酒の量に驚く

「おい……その量本気で飲む気か？」

「当たり前だよ……それでレッカちゃんは気持ちが変わった？」

「はい……私、時空管理局の魔導師を目指します……!!」

「そうかそれじゃここに連れてきて正解だったな」

スウェンが笑うとなのはは聞く

「そう言えばなんでここに連れてきたのやっぱりフェイトちゃんに断れたから？」

「何でもかんでもフェイトのせいにするな！今日はフェイトは関係ねえよ」

スウェンは顔を掻きながら言う

「今日は…別に深い意味はないただ喜んでほしかったそれだけだ」

スウェンが言っていると料理が運ばれてくる

「さあ食うか」

「そうだね」

「はい。戴きます」

3人とも夢中で料理を食べて行く

番外編 8 話自分にとって大切な日々

「今日はありがとうございました」

「ああ、気をつけて帰れよ」

スウェンは手を振りレッツカを見送る

「さてつと…なのは起きろ」

「ふにゃゝあれもう朝？」

「いや違うから…そうじゃくて帰るぞ」

「どこにゝスウェン君の家？」

なのはの冗談を無視しなのはの家へと行く

「確かヴィヴィオがいるはずだな…」

チャイムを鳴らすと意外な人物が現れる

「あれスウェンどうしたの？」

「なんで…フェイトがなのはの家に？」

「ヴィヴィオに呼ばれたんだよそれに一人でお留守番なんて危ないしね」

「そうか…」

スウェンはなのはを降ろす

「何かずいぶん酔ってるね」

「なのはママ起きて!!」

ヴィヴィオはビンタをする

「あれゝおはようフェイトちゃん、ヴィヴィオ」

「おはようなのはでも今は夜の10時だよ」

「そうなんだゝ」

「俺そろそろ帰っていいか。明日までに出さなきゃならない課題もあるし…」

スウェンが言うとフェイトはスウェンのほうへ来る

「私も帰ろっかななのはも戻ってきた訳だし…」

「フェイトママとスウェンパパ帰るの？」

ヴィヴィオは寂しそうな顔をする

「でもあのなのはに任せておけないよね」

「そうだな今日だけは泊まるか」

「でも課題はいいの？」

「どうせ怒られるのは俺だけだから別に今日じゃなくてもいいしな」

スウェンが言うとうィヴィオは笑顔になる

「久しぶりにスウェンパパと寝れる」

「ヴィヴィオ寝るのはいつもと同じくなのはとだよ」

「やだやだスウェンパパと寝る」

フエイトが怒鳴るとスウェンはフエイトの肩を叩く

「別にいいじゃねえかよフエイト」

「でも…教育上悪くないかな？」

「平気だと思うぞ多分」

「ならいいけど…」

フエイトが言うとうィヴィオは抱きつく

「それで俺たちはどこで寝れば？」

「一応私達の隣の部屋が空いてるよ」

「そうかじゃそこで寝るけどフエイトは？」

「私は前見たくなのはと寝るよ」

フエイトはスウェンに手を振りなのはを布団へと連れて行く

「ヴィヴィオね、スウェンパパに話したいことたくさんあるんだ」

「ヴィヴィオ学校は楽しいか」

「うん！」

ヴィヴィオが頷くとスウェンはクライスソウルの整備を始める

「スウェンパパデバイスの整備できるんだ」

「まあ一応はなそれにこのデバイスは特殊なデバイスだから俺以外は整備できないしな」

スウェンはクライスソウルを整備しながら言う

「ねえスウェンパパにお願いがあるんだ」

「何だよ…」

「ヴィヴィオ用のデバイス作って」

「無理だな第一なのは許可がねえとヴィヴィオのデバイスは作れねえんだ」

スウエンは頭を掻きながら言う

「まあ後の話は明日にしてもう寝るぞ」

「お休みスウエンパパ」

電気を消しスウエンは眠りにつく

番外編 9 話仕事の二環

「うゝ頭がガンガンするゝ」

「まあ、あれだけ飲んだら誰だってなるわな」

スウエンは朝ごはんを作りながら言う

「おはようスウエン、ヴィヴィオは？」

「ヴィヴィオならもう学校に行ったよ。なんでも今日は何かあるとかで」

「あつ…忘れてた…」

なのはは急に大声を出す

「どうかしたのなの？」

「スウエン君すぐに着替えてきて」

「いきなりどうしたんだ？」

スウエンが聞くとなのはは今日の予定を話す

「なるほどそれじゃこの恰好じゃ不味いな」

スウエンは自分の家へと転移する

「今日、何かあるの？」

「ヴィヴィオの学校で魔法の説明会？」

「つまり授業を教えに行くんだね」

フェイトが言うとなのははフェイトの肩を掴む

「そこでお願いがあるんだフェイトちゃん」

「何…」

「私達と一緒に来てくれる？」

フェイトは悩んだ末に頷く。それから20分後

「ごめん…遅れた」

「いや俺も今来たところだしでも平気かなのは」

「うん問題ないよ」

「私も来てるし今のところは平気だと思うけどね」

フェイトはなのはを背負い職員室へと入るスウエンもその後が続く

入る

「今日、魔法の授業を教える為に来た時空管理局の魔導師です」

「みんな楽しみにしてますよ今回はお願いしますね」

「はい！！」

フェイトは返事をして外に出る

「うゝ気持ち悪い」

「なのは、決して吐かないですよ。魔導師として堂々とするんだよ」

「そうは言ってもね気持ち悪いものは気持ち悪いの」

「仕方無い。ほらなのはこれ飲んで」

スウェンは何かの薬をなのはに渡す

「これ何？」

「いいから飲んでそうすれば楽になる筈だから」

スウェンに言われなのはが飲むと体調が完全回復する

「これで一応は平気だろ」

「ありがとうねスウェン君！！」

なのははお礼をしてヴィヴィオ達の待つ場所へ行く

「それでは講師の先生を呼びますね」

先生が言くと2人の時空管理局の魔導師が来る

「この二人は数々の事件を解決し、今じゃその名を知らぬものはいないとまで言われた魔導師です。それでは自己紹介してもらいましょう」

先生にマイクを渡され二人は自己紹介を始める

「私は高町なのはです皆さんよろしくお願いします」

「俺は高町スウェンです今日はよろしく」

なのは達が自己紹介をすると生徒たちがざわざわする

「あれって確かヴィヴィオちゃんのお父さんとお母さんだよね」

「でも何かずいぶん若い気がするけど」

「それより本当に強いのかな」

皆が話していると先生が止める

「はいはい。お話はそこまでにして話を聞きましょう」

先生が言うとなのは話し始める

「これが魔法を使用する際に使うデバイスですこのデバイスにもたくさん種類があります一般的に使われているデバイスはストレージデバイスと言ってAIを組み込んでいないデバイスです」

その後もどんどんと言い授業が終わると恒例の質問コーナーが来た
「何か質問のある人はいるかな」

なのはが聞くとほとんどの子が手を挙げる

「それじゃ君立って発言してくれる？」

「魔導師になるにはどうすればいいですか」

「それは色々あるよ例えば学校に入って勉強をしてなる方法それから現在時空管理局で働いてる魔導師からの推薦状とかね」

なのはが言うと男の子は座るその後も質問を受けては答えるを繰り返して授業は終わる

「ふにゃゝ疲れたゝ」

「お疲れなのは、スウェン」

フェイトなのはとスウェンに飲み物を持ってくる

「それでうまく行った？」

「うん、一応ね」

なのははジュースを飲みながら言う

「それでこの後どうするんだ？」

「はやてがここまで来てくれたって」

「いつ…居酒屋かよ」

「にやははスウェン君の酒飲めないもんね」

なのはとフェイトに笑われながらスウェンはついて行く

番外編最終話明るい明日

「本当に居酒屋かよ」

「確かにはやてはお酒好きだもんね」

フエイトとなのはは帰ろうとするスウエンを掴み中へ入る

「お待たせ」はやてちゃん

「ずいぶんと遅かったな今日はちゃんとできたか？」

「うん、一応はねでもなんで居酒屋なの？」

「何か日本にいる時の事思い出してな急に来たくなったんや」

はやてが言つとコウが来る

「はやてそろそろ始めたいんだが準備はいいのか？」

「もう始めてええですぐに行くからな」

「了解した」

コウは敬礼をして出て行く

「はやてとコウうまく行ってるみたいだね」

「フエイトちゃんとスウエン君やっていい感じやないか」

「でもまだスウエンは悩んでるんだと思うんだ」

フエイトが言つとはやては驚く

「つまりまだなのはちゃんとフエイトちゃんて悩んでるそう言いた
いんやな」

「単刀直入に言えばそうだね」

「でもそればかりはスウエン君本人に聞かないとわからんな」

二人が話してるとなのはが呼ぶ

「今日ではつきりさせればええやないか」

「そうだね」

フエイトとはやても席に着く

「スウエン君」お酒飲まないの？」

「俺は酒は無理だからな」

スウエンが断るとはやてが来る

「はつきり言ってもらおうかスウエン君」

「なにをだ？」

「なのはちゃんとフェイトちゃんどっちが好きなのかや」

「！！！！」

スウエンは驚き危うくコップを落とすところだった

「いきなり何の話だよ」

「だから結婚するならフェイトちゃんとなのはちゃんどっちかっていう話や」

「それ今言わなきゃ駄目か…」

「当たり前やん」

はやてに言われスウエンは戸惑う

「この宴会が終わったら教える」

スウエンはそう言う外に出る

「俺の未来か…」

スウエンが考えてるとフェイトが来る

「いきなり飛び出すからびっくりしたよ」

「悪い…フェイト」

スウエンの目には涙があふれていた

「どうしたのスウエン？」

「いや何でもないただ目にゴミが入っただけだ」

スウエンは目をこすりながら言う

「私はスウエンがなのはを選ぶうとも後悔はしないよ」

「俺は…」

スウエンは心の中では決まっているのに言いだせないでいた

「私はスウエンの友達としてサポートするから」

フェイトが笑顔で言うスウエンはフェイトを見る

「どうしたのスウエン？」

「フェイト受け取ってくれるか…」

スウエンから渡されたのは綺麗な七色の羽だった

「あの最終決戦の後ノルンに渡されたんだ。あなたと運命を共にす

るものに渡せつてな」

「それじゃこれはプロポーズでいいんだよね」

「そう取ってくれて構わないぜ」

スウエンが言うとフェイトは抱きつくそれからはやて達に説明をしてスウエンは自分の家へと帰った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6418m/>

続・聖剣士伝説リリカルなのは

2011年4月8日16時43分発行